

第二期 第百十二号

(初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2025. 11. 10

定有堂書店

発行

スモールブックハウス

奈良 敏行

なんでもかんでも詰め込んだ巨大官庁

岩田 直樹

日々是雑言(ぞうこん) 10

萩原 俊郎

金、名声、本物。あとそれから…

板野 田香

みせられて

おぎはらきえ

Happier Than The Morning Sun

高木 善祥

本を作る側から (32)

村瀬 謙介

内坪井町日記 (18)

齊藤 仁昭

論語について (6)

小原 修治

老春 (前)

古賀 啓三

蔵の外

ムラカミヒロミ

点と点がつながる

イギリス留学記②

三浦 永理

給食

あきの素生

編集後記…

ドラマメリア

スモールブックハウス

奈良 敏行

(定有堂 主人)

このところ冒険というテーマに惹かれている。いま読んでいる一冊に『冒険者たち』がある。ねずみの仲間の冒険だ。いたちたちの横暴から仲間を守る冒険だ。冒険はおのずと仲間を引き寄せるようだ。冒険の生成する初発衝動に心が騒ぐ。

本屋は冒険の生成する場所でないとならない。わたしは本屋は好きだが、出かけていくことは少ない。それでもここ数年来、本屋のあり方が変わったことは感じている。スモールブックハウス化が進んでいる。そんな状況を知るのに『本のある空間採集』が役に立つ。個人本屋を中心に全国を訪ね、取材し、店内上方から店内を透かしてイラスト化している。そして店主がどこに座っているかも描いている。この二つを眺望できれば十分訪ねた気分になれる。小さな本屋の初発衝動は、スモールブックハウスに処を得ている。大事なのは「ハウス」という生成部分だ。『歩くという哲学』を読んでいたら、ヘンリー・ソローの章で、

ソローが自分の小さなハウスにはイスが三つ置いてある、と語るのが紹介されている。「椅子が三脚―ひとつは自分のため、二つめは友達のため、三つめは友達の友達のため―」これがソローのハウスの仲間だ。そのようにしてハウスは冒険の入口になる。スモールブックハウスにも三つのイスが置いてあるといいなと思う。三つのイスが置いてある本屋は冒険仲間のいる本屋だ。本屋には仲間が必要なのか、商いだけのための本屋ならとくに仲間はいらぬ。しかし、もう少し別の仕方で顧客との付き合いも必要だろう。本屋のフィールドから下降し、本屋を主語としないで、自分の人生の初発衝動の受け皿が本屋だったと考えるならば、本屋は生きることの生成変化の上に発生する。すると生きることの仲間が必要のように本屋にも仲間が欲しいと望むようになる。本が好きな、「本」へと冒険を重ねる仲間だ。ではどうしたら彼らと出会えるのか。

ソローはイスを三つ置こうと言ったのだ。定有堂の三つのイスはいまは「読書会」や「太極拳」へと広がっている。そこに冒険する仲間たちがいる。日常から少しだけ逸脱してみる。そこに冒険の入口はある。

本屋には出かけないと言ったが、先日数人の仲間と、倉吉の古本屋「エスキース」を訪ねた。店内中央にあるべき中立ちの棚をあえて置かず、イスの四つあるテーブルを設

けた本屋だ。この構えそのものが、スモールブックハウスの存在証明だ。連れの仲間も、「なぜイスとテーブルが？」とは誰も疑問に思わなかったようだ。「ハウス」感が強かったためだ。周囲の棚の本も、ご主人の米原秀明さんの個人蔵書から始まっているので、一冊一冊の米原さんの読書歴が刻まれている。だから話は尽きない。十月に入っているのに、その日はとても暑い日だった。ご主人の米原さんはレジカウンターの後ろの部屋へ消えたと思うと、冷たいコーヒートと菓子をみんなの分だけ持ってきた。やはりここは「ハウス」なのだ。

ヘンリー・ソローが小さく縮減して生きることの奇跡だったとしたら、米原さんも同じように小さく生きることの奇跡なのだ。いまここに、このイスに座っている数人はみな本が好きな人たちだ。テーブルがありイスがある。しかもその四方は本がぎっしり詰まった本棚なのだ。この空間は「冒険」の入口だ。

古書店「エスキース」は鳥取県立美術館の隣りなので「美術」の本も多い。わたしは『最後の秘境 東京藝大』を買った。学びの冒険の世界だ。米原さんは元医歯薬出版の編集者なので、「ケア」の周辺の本も多い。みんな米原さんが読んだ本だ。東畑開人の『聞く技術 聞いてもらう技術』を買った。あと、米原さんは不思議な人で、人気の文庫本

をあえて親本を探して蔵書している。『スモールハウス』、『懐かしい未来』などいくつもあった。しかし高野秀行の『間違う力』（メディアファクトリー）があつたのには驚いた。角川新書に同名の本があり、とてもいい本なので、定有堂では力を込めて数十冊売った。もちろん強く勧めた。でも親本に出会うとは思ってもみなかった。新書は大多数の人をターゲットにしている。でも単行本は少数の人に向けて作られる。本は最初は編集者の強い情念によって作られる。著者は編集者に発見される。しかし、新書や文庫に二次出版されるとその情念は違うものとなる。親本には初発衝動の痕跡がある。その比較に気づいた驚きだった。これが米原さんなんだと思った。

人文書が中心なのだが、岩波少年文庫や福音館を中心とした児童書のコーナーもある。定有堂の「二冊の本の衝撃」のひとつでもあった『くいしんぼうのおおむしくん』はあるのかな？と投げかけてみた。背表紙がぎっしり並んだその中にひそんでいた。これにもびっくりした。わたしはこの本にまつわるある絶望物語が記憶に焼き付いていたので、手元に置いておきたい本だった。米原さんは店の本をみんな読んでいる。この本の話もしたかったが、すでに日は傾いていた。

一緒に行った本を読む仲間たちは、両腕いっぱい本を

抱えていた。わたしたちはここで何を学んだのだろう。わたしははじめてスモールブックハウスの存在を知った。ローが奇跡だったようにエスキースも奇跡だと思った。
2025. 10. 07.

斎藤惇夫・薮内正幸『冒険者たち』岩波少年文庫 2000

政本哲也『本のある空間採集』学芸出版社 2023

フレデリック・グロ『歩くという哲学』山と溪谷社 2025

二宮敦人『最後の秘境 東京藝大』新潮文庫 2019

東畑開人『聞く技術 聞いてもらう技術』筑摩書房 2022

高村友也『スモールハウス』同文館出版 2012

高野秀行『間違う力』メディアファクトリー 2010

ヘレナ・ノーバーク・ホッジ『ラダック懐かしい未来』山と溪谷社 2003

槇ひろし・前川欣三『くいしんぼうのおおむしくん』福音館書店 2012



なんでもかんでも詰め込んだ巨大官庁

岩田 直樹

(再解釈本舗・「読む会」講師)

春先だつたらうか、仕事終わりに立ち寄った本屋の新書コーナーを眺めていたとき、新刊の分厚い本に気づいた。パラパラめくるとなんと五五〇頁もある。値段は意外に安く二五〇〇円(税別)。厚さのわりにお買い得だ。購入を即決。しかし、この本、内務省研究会編『内務省―近代日本に君臨した巨大官庁』(講談社現代新書、二〇二五年四月)は半年近く、自宅の本棚の隅で眠っていた。

このところ戦前の思想を右、左を問わず読んでいた。治安維持法に基づく特高(特別高等警察)の出版にはしばしば立ち会っている。特高の所属はどこなのか、と調べると内務省であった。「内務」というからには警察業務だけではあるまい。国内に起こるすべての出来事へ対処する官庁なのか。管轄する範囲が広すぎて収拾がつかなくなりはいか。ふと本書の購入を思い出したのである。

読む前に、内務官僚といえど誰を思いつかか、少し考えてみた。強い印象を残した三人の顔が浮かぶ。

一人目は石破茂総理大臣(二〇月二〇日現在の父、二郎(一九〇八―一九八二))。困ったときのウィキペディア頼みである。検索して詳しい経歴(職歴)を見ると、これがなかなか興味深い。

内務省社会局保険部↓警視庁保安部健康保険課兼任
社会局保険部↓福岡県学務部社会課長↓山形県警察部
保安課長↓警視庁警視・本所厩橋警察署長↓宮城県学務
部教育課長兼社会教育課長↓厚生事務官失業対策部↓
職業部↓職業局技能課↓北海道庁拓殖部長↓第二五軍
軍政部↓陸軍司政官・昭南軍政監部↓(敗戦)。戦後は建
設事務次官、鳥取県知事(四期)、参議院議員、自治大臣
国家公安委員会委員長などを歴任し、癌のため任期途中
で辞任。

次に思いつのが古井喜実(一九〇二―一九九五)である。石破と古井はともに鳥取県八頭郡出身で、二人の生家は五キロほどしか離れていない。

一九七二年の田中角栄による日中国交正常化の際、水面下で奔走した古井の姿は鹿雪瑩の労作『古井喜実と中国―日中国交正常化への道』(思文閣出版、二〇一一年)に詳しい。古井は同年に行われた衆議院選挙で落選(鳥取選挙区)。「外交は票にならない」と言われたのを、当時一〇歳の私は記憶している。

内務官僚として古井はスピード出世を続け、茨城県知事、愛知県知事、警保局長、愛知県知事などを経て四二歳の若さで内務次官となる。戦後は衆議院議員、厚生大臣、法務大臣、日中友好議員連盟会長などを務めた。

もう一人は、「カミソリ後藤田」と呼ばれた徳島県出身の後藤田正晴（一九一四―二〇〇五）である。中曽根政権下で勃発したイラン・イラク戦争で、海上保安庁巡視艇、海上自衛隊掃海艇をペルシア湾に派遣したい首相に強固に反対し続けた官房長官の姿は、大学生の私に強烈な印象を残した。

「日本列島不沈空母化」発言で有名な中曽根康弘（一九一八―二〇一九）は、五年の長きにわたり政権を担当した戦後を代表するタカ派政治家である。経歴（後述）を見るとハト派ではない後藤田が首相に派遣を断念させたにもかかわらず（ふつうは閣内不一致で更迭？）、中曽根は政権発足から退陣まで官房長官として使い続けた。宇沢弘文（一九二八―二〇一四）が成田空港問題の調停のために頼ったのが後藤田であった。

後藤田は富山警察部労政課長の後、陸軍に徴兵され、台湾軍司令部と台湾総督府の連絡将校のときに敗戦を迎える。戦後は警察庁長官としてよど号ハイジャック事件、あさま山荘事件、テルアビブ空港乱射事件などの左翼テロに

対応した。部下の一人に初代内閣安全保障室長の佐々淳行（一九三〇―二〇一八、『東大落城―安田講堂攻防七十二時間』文藝春秋、一九九三年、で有名）がいる。その後自治大臣、国家公安委員会委員長、内閣官房長官、総務庁長官（初代）、法務大臣、副総理などを歴任した。

現在の感覚で言えば、石破は内閣府（警察、北方担当、国家公安委員会）、厚生労働省、文部科学省、自衛隊、国土交通省、総務省を渡り歩いている。古井は総務省（地方行政）、内閣府（警察）、厚生労働省、法務省、そして後藤田は内閣府（警察、国家公安委員会、官房長官）、自衛隊、総務省、法務省に関係したことになる。

石破、古井、後藤田の三人が担当した業務で内務省の仕事の大半はカバーできる。内務省は一八七三（明治六）年に生まれ一九四七（昭和二二）年に廃止されるまで、地方行政、警察行政、土木行政、衛生行政、社会行政などを所管した「官庁の中の官庁」であった。

本書は、権力闘争史に偏りがちな行政史とは異なり、衛生・土木、防災・港湾などの私たちの生活に密着した分野についても章を設けて論じている。一つの省庁を主人公として、その七四年にわたる生涯を描く『内務省』は、戦前の行政を知りたい一般読者にとって必読の書であろう。

日々是雜言（ぞうごん） 10

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

悪い予感ほどよく当たる

私のコラムを続けて読まれている方は（まあ、あまりいいだろうが）分かると思うが、世の中だいぶヤバくなってきた。残念ながら、悪い予感ほどよく当たるものだ。

音信不通1008号（7月）では、「究極の選択」として「今度の参院選では、生まれて初めて自民党に票を入れるかも知れない」と書いた。「とにかく石破政権には今しばらく頑張つて欲しいのだ。極右の高市やコバホークがわがもの顔で出てくると思うと、ぞっとする」

願いもむなし、石破自民党が大敗した1009号（8月）。「すでに石破おろしが吹き荒れている……どの野党がマウントを取るかという液状化、不安定化した政権では、確実にポピュリズムが台頭する」。自公解消、自維連立のドタバタを

見ると、この予感も当たってしまった。

「石破がんばれ」のデモや内閣支持率アップが起きて「ああ、同じ思いの人たちがいたんだ」と少しホッとしたものの、続く110号（9月）では、強まる石破おろしに「歴史を偽造・修正されないためにも、首相として何らかの『爪あと』を残して欲しい」と、私も半ば観念しつつあった。

その爪あと……戦前の日本はなぜ無謀な戦争に突き進んだのか」を説いた戦後八十年談話は、石破の歴史に対する誠実さはよく伝わったが、靖国参拝や排外主義を売り物にがむしやらの権力の座へのし上がってきた高市には、たぶん爪の先ほどの痛みもなかったのではないか。

百年前、ワイマールで

おりしも9月には、わが倉吉市の市議選が行われ、結果は無投票になったが、告示初日のみの選挙運動では、県立美術館の前にオレンジ色のTシャツやネクタイの集団が並び、「コロナではワクチンが半分以上廃棄され、税金が無駄になった」と街頭演説していた。

初出馬の参政党の候補者だった。元消防士なのに「ワクチン接種で救急車の搬送が激増した。マスコミは隠している」と叫ぶので、たまたま通りかかった私は思わず「いい加減な

デマを流すな―」と生まれて初めて街頭でヤジってしまつた。いかんいかん、興奮しては。オレンジ色の連中はこつちを見てニヤニヤしている。

不思議な「既視感」があつた。「敵」を仕立て、街頭で人々を扇動する。生まれてもないが、1920年代後半、当時は世界一進歩的とされたワイマル憲法下のドイツが無惨な姿になるまで、たぶん繰り返された光景だろう。

石破を支えた村上誠一郎総務相も思いは同じようで、退任のあいさつで「私はここ数年、非常に危機感を持っている。それは今、世界が百年前に戻りつつあるからだ」と語り、ナチスの台頭から戦争を招いた歴史、ポピュリズムがはびこる日本の状況を踏まえ、「民主主義が危ない」と涙声で訴えかけた(毎日新聞)

なにか暗くて大きなものが向こうからやつて来ている。

「苦い薬」は飲みたくないが

昔、新聞社の講演会に呼んだ政治学者の山口二郎に「政治家に大切なことは？」とまことに青臭い質問をしたら、高校でクラスメートだった彼は「英国の公約には『ウィットシュリスト』と『ポリシー』の2つがある。前者は有権者が望むリスト。後者は、これをやるならこれをやめようと有権者に呼

びかけること、ポリシーが政治家には大切だ」と、これまた生真面目な答が返ってきた。

物価高の今、各党が「手取りを増やす」だの「消費税減税」と競っているのは前者で、有権者は喜ぶが一時の「対症療法」に過ぎない。それどころか、アベノミクスをなぞり赤字国債発行も辞さない高市政権の「積極財政」は、物価高の原因である円安をさらに招いて輸入品やエネルギーが高騰し、「物価高と円安の負のスパイラル」に陥る予感がある。悪い予感ほどよく当たるものだ。

「苦い薬」は飲みたくないのが世間だから、勇氣をもってポリシーを語る政治家は、今の日本では当選がおぼつかないように見える。しかし「これをやるならこれをやめよう」というポリシーの本質は、実はかつて流行語大賞までなつた、われわれ日本人の好きな言葉「米百俵」の精神と同じで、すぐぶる日本向きなことを付け加えたい。

今は少しがまんしても、未来の自分、そして子や孫たちのため、長期的な成長戦略や財政再建の道すじ、税と社会保障の在り方を、党派を超えて根気強く議論する。これこそ「民主主義の国」のあるべき姿に他ならない。

金、名声、本物。あとそれから…

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)

二年ぶりに、ウェス・アンダーソン監督の新作が公開される。タイトルは『ザ・ザ・コルダのフェニキア計画』。主演はベニチオ・デル・トロ。過去作『フレンチ・ディスパッチ』でも怪演を見せた俳優であり、彼の演じた囚人の強烈な印象はいまだ記憶に残っている。

映画『ザ・ザ・コルダのフェニキア計画』のポスターには、資本家の象徴のように葉巻をくゆらせる中年男性が描かれている。白い浴槽に浸かり、サイドテーブルには香水と書籍、白ワインが入ったグラス。だがその身体はガーゼだらけで、目のまわりにはノックアウトでもされたかのような赤黒い痣——もう、クセが凄い。この画だけで物語の不穏さが伝わってくる。これは見逃せない。

上映期間も限られていると知り、県内で唯一の上映館「シネマ・クレール丸の内」へと足を運ぶことにした。

第二幕の客はまばらで私を含めわずか六人……ろ

くー？ ウェスの描く愛らしい世界観は特に女性に人気で、SNSでは「#ウェス・アンダーソンすぎる風景」というハッシュタグが付けられるほど。なのに、何故。きつと夕食時だから人が少ないのだろう。午前中の部は満員御礼だったはずだ……多分、そう。

——一九五〇年代、都市国家群「フェニキア」を舞台に、六度の暗殺未遂を乗り越えてきた富豪のザ・ザ・コルダ（以下、ザザ）は、壮大なインフラ整備事業「フェニキア計画」を推し進めていた。しかし妨害工作によって資金難に陥った彼は、疎遠だった修道女見習いの一人娘・リーズルを後継者に指名し、彼女を伴って事業の再興と母親の死の真相を追う旅に出る。果たして、プロジェクトは成功するのか？ リーズルの母を殺したのは誰か？ そして、父と娘は「本当の家族」になれるのか——？

本作の代名詞《クライム・ホームコメディ》のとおり、開幕5秒で撃墜されるプライベートジェット。ウェス作品史上、屈指のスピード展開である。ストーリーは基本的に一本道で、映画の方向性もザザによる侵略マップにより早い段階で明らかとなる。まずは山脈トンネルの開発会社、水路開発を手掛ける海運王、砂漠での電力発電堤防を経て不仲な資産家ヌバル叔父のもと——という展開だ。

六度の暗殺未遂を経験したザザは、劇中でも追加で五度

の臨死体験をくり返す。いつ命が尽きるかわからない身を案じ、跡継ぎの「試用期間」として娘のリーズル同行させているのだが、彼女にとってもこの旅が、ザザを父として受け入れるかどうかを見定める「試用期間」でもあるのだ。しかし、ザザは資本調達の交渉に赴くたび、相手方と口論ばかりしてしまう。そんな「交渉」とは程遠い姿を、リーズルは冷ややかなまなざしで見つめる。

そもそもザザにとつての「フェニキア計画」は、子どもに「遺産」「作品」を残すための事業であつた。彼が懸命になる理由は分かるのだが、そのやり方はあまりに乱暴で、不器用で、どこか滑稽でもある。方法論・手段がメチャクチャなのだ。ウエスの代名詞ともいえる、均整の取れた構図とは対照的に、キャラクターやセリフ運びのアンバランスさ——そのギャップが本作の魅力ともいえる。

ウエスの魅力はおおいに、静止画のような風景が映像として動き出す点であり、その証拠にどこで一時停止しても一枚の絵として成立してしまう。その精密さと構図の美しさは、今回の作品でも健在だ。ただし、この「絵画的構成美」については多くの評論で語り尽くされているため、ここでは別の視点で彼の魅力を述べてみたい。

私が思うウエスの真骨頂は、「アナログを意識的かつ有効に持ち出している」点にある。舞台が、五〇年代であるため

そう成らざるを得なかったとも言えるが、逆に時代設定自体が、アナログな機器や方法を活かすために選ばれているのではないか、と思つてしまう。

たとえば本作で登場する電話は、片手に収まるものではなく、弁当箱ほどの大きさの送信機と受話器が一体となつたもの。このカットひとつで、ザザの威厳や会合の駆け引きが一瞬で伝わる。思えば「グランド・ブダペスト・ホテル」でも同様の演出があつた。ホテルのオーナー、グスタヴが暗殺者から逃げるシーンでは、最新鋭の武器を手にした追手に対し、彼は人脈一本で逃げ切つてしまうのだ。

『AホテルからBホテルへ、BからCへ、CからDへ——』と電話一本で伝令が繋がり、数珠つなぎのように彼を匿つていく。最新鋭のモノが、人間くさくアナログな手法で打ち碎かれる逃走劇は、なんとも滑稽で愛おしい。

さて、富を手放したザザは、結局のところ計画失敗に終わったのだろうか。「経済」という言葉の語源は「経世済民」。世の中を治め、民を救う、という意だ。そう考えると、ザザは本質的に成功を手に入れたのかもしれない。

それにしても「家族の特性」とは外見以上に、口癖や仕草に表れるものなのかもしれない。作中、一度たりとも微笑まなかつた父と娘の仏頂面に、温かな心情を抱いた。

みせられて

おぎはら きえ

(蔭山)

胃カメラをつっこまれて次の一節が思い出された。

なぜ露出した腸が凄惨なのであろう。何故人間の内側を見て、悄然として、目を覆ったりしななければならないのであろう。何故血の流出が、人に衝撃を与えるのだらう。何故人間の内臓が醜いのだらう。…それはつやつやした若々しい皮膚の美しさと、全く同質のものではないか。

これは三島由紀夫『金閣寺』の主人公溝口が、戦時中に勤労動員で大阪を訪れた際、空襲に遭って腸が露出した工員を見たときの回想だ。

人間ドックの胃部内視鏡検査を受けている。口から胃カメラを入れられながら横たわる私の目の前にはモニターがあり、私の胃の中が映し出されている。普段、鏡に映る自分は年を重ねて肌のハリがなくなりシミが増え、唇の血色は悪く疲れた顔をしているというのに、この胃の内部はどうだ。均一で無垢なピンク色、張りめぐる毛細血管の健康な赤み、艶やかでなめらかな筋肉…。皮膚より胃の方が若々

しく見えるではないか。…駄文だな。三島だったらこの胃をどんな比喻を使って華々しく書くだろうか。

十月の定有堂教室「読書室ビオトープ」の課題本が『金閣寺』で、過去二回読んで今回三回目の通読になったのだが、溝口の金閣寺(すなわち美)への強烈な執着があいかわらず謎だった。

三島由紀夫といえば『仮面の告白』『潮騒』などの小説市ヶ谷駐屯地に乗り込んでの劇的な自決、そして『薔薇刑』で披露したボディビルで鍛えた肉体を想起する。

三島の関連本をばらばら読んで次の引用が目に入った。ギリシア人は美を求める情熱の行きつくところ、必然的に、自己そのものが美の体現者であることを欲した。そのために神にかけて肉体を訓練した。(三島由紀夫『不道德教育講座』「肉体のはかなさ」より)

「美の体現者」。三島も虚弱で洗濯板と評された貧相な肉体を訓練し、作家という肩書きを大きく逸脱して自身を「美の体現者」に転位させた。「美の体現者」とは「見られる側」、羨望される側だ。

この健診の待ち時間には佐藤秀明『三島由紀夫 悲劇への欲動』(岩波新書)を読んだ。この中で、三島が『金閣寺』を書き終わった数日後に参加した神社の神輿担ぎの体験談が引用されている。

今では私は他人の陶酔を黙って見ていることはできない。自分がそこから隔てられているという悲劇的な諦念に満足することはできない（「陶酔について」「新潮」一九五六年十一月号）

『金閣寺』の主人公は、実際の金閣放火事件の犯人のプロフィールを使いながらその思考はほぼ三島自身と考えられる。主人公も美を「見る側」ではなく、美として「見られる側」になりたかったのではないか。そんな考えが浮かんだ。

自分を「見られる側」に変えるには自身の努力も大変なものだが、案外、外野が邪魔をするものだ。ボディビルをはじめた三島は、当時交際していた女性から「よせばいいのに、当人は何んだか、たいへんに張り切っていました」（岩下尚史『ヒタメン 三島由紀夫が女に逢う時…』）と冷ややかに見られていたようだ。そして「見られる側」になっても安泰ではない。『金閣寺』の溝口の初恋相手の有為子は美しい娘だが、妬み深い女からは石女（うまずめ）の相だなどと噂される。

健診の採血をしてくれた看護師の女性が美人だった。すらりと背が高く、艶のある黒髪のボブヘア、大きくてきれいな目。受診者を呼ぶ声も上品で、待合室に姿を現す度にちらちら見てしまった。彼女はこの視線を感じただろう

か。やはり昔からこういう視線を浴びてきたのだろうか。美人だと思われて見られるのは快感だろうか。それともストレスだろうか。

って、いろいろなことを考えていたつもりだけど、まだ胃カメラが終わらない。去年より長いんじゃないか。去年の介助の看護師（中年女性）は背中を大きく優しくさすってくれて、おかげで背中の方に意識を逸らせて、大いなる慈悲も感じて心の中で合点した。今年の介助は若い男性で、私の肩先をゆっくり短いストロークでさするが喉や胃から意識を逸らす効果が全くない。私が女だからあまり触ってはいけないと気をつかっているのか。いいからちゃんと背中をさすってほしい。さすってほしいがそんなこと言えない、言える状態じゃない。空気を入れてお腹が張って苦しい。ほら、胃カメラがさらに奥に進んでいく感覚が伝わってくる。

「はい、力を抜いて、肩をさげましょう」と彼はこわばる私の肩を下に押した。なんだお前は、肩を下げる係なのか。

（著作） おぎはら きえ 『迷妄蒙昧』 蔭山 2025

Happier Than The Morning Sun

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

十月四日(土)、境港の上道町周辺で行われる蚤の市に出店。場所はこれで三回目となるカフェマルマスさん。

毎回来てくださる方もいて、「これ買おうと思ってたんですよ」と言われたり、逆に意外なものが売れたり。出店のたびに選書は調整しているが、いつも手応えと驚きがあつて、商売の醍醐味を感じる。

*

十月十一日(土)、店の方はお休みにして、汽水空港の十周年フェス「一斉着陸」に出店。台風や雨の心配もあったが、当日は夏が戻ってきたような暑さ。

尹雄大を聞き手に、坂口恭平と丘啓輔のトークイベントや、寺尾沙穂、泰尊のライブと中身も盛りだくさん。

クラファンで三百八十五万集め、入場無料。モリくん一家・スタッフ・出演者・出展者・お客さんが一体となって作り上げた素晴らしいイベントだった。

ワン&オンリー過ぎて大文字の出版業界からの注目が薄

れてしまった気がするけれど、最も人口が少ない県の小さな町で、ほかの誰とも似ていない本屋が十年続けられた事実はとても大きい。

飲食と物販含めて、七十店以上の出店者があり、その中で本屋が十店近くあったことに、汽水空港らしきを感じた。品ぞろえがほとんど重なっていないので、本屋をハシゴする方が多数おられた。

どちらかと言うとお祭りに参加する気分で出店したので本もそれほど持っていかなかったけれど、ふたを開けてみれば今までのイベント出店で一番の売上だった。さすが汽水空港のフェス。そして商売は難しい。

*

十月十五日(水)、まるにわさんとの共同企画で「空きやBar」に出店。まちづくりや空き家活用と絡めたイベントで、現在空き家となっている元・居酒屋での開催だった。友人や店のお客さんと、まるにわの齋藤さんの知人が初対面にもかかわらずお酒を酌み交わし、楽しそうに話し込んでいる。ベンチャー企業の営業の方や、若桜街道沿いでゲストハウスを始めようとしている会社の社長さんなど、店だけでは出会えない方のお話も聞くことができた。

平日の開催にもかかわらず四十人ほどの来店があり、そのうち十五人の方に本を買っていただいた。鳥取に関するも

のやまちづくり関係のほかには歌集も何冊か。

*

十月十九日(日)、鳥取駅前的小鸟ドハットで行われた「トットリヒトハコ」に出店。数年前に個人として参加したことはあったが、お店を始めてからは初。プロアマ問わずという条件だったので、鳥取市内のブックカフェ・モノローグさんや米子の小吉文庫さんほか、見知った方々も。

また以前お店に来ていただいた、大山で農業をされているご夫婦も、今回は本屋として出店。

一箱古本市なので、古本のみを持ち込んで臨む。最初に売れたのが向田邦子の文庫二冊と、幸先の良いスタート。

いろんなジャンルの本を持っていたところ、いろんなジャンルの本が売れた。その本を選んだ理由を語ってくれる方も多く、こちらも接客を楽しんだ。

この日は友人に店番を頼んだところ、店に戻った時に「一箱古本市とハシゴしてくれた方がいましたよ」と報告を受ける。外に出て宣伝する必要性を感じた。

そして搬入・搬出時に手伝ってくれた鳥大生のスタッフのスマートな働きぶりに感謝。

*

九、十月は積極的に出店してみた結果、数カ月に一度だった、その場限りのイベントだったりするが、そこに本

屋があれば本が売れるという実体験を積むことができた。

前職で何度か経験したことを思い出す。競合店が閉店しても、お客さんが流れてくることはほとんどなく、どんなに対策を練っても売上が十パーセントも伸びない。

アマゾンで買うならまだマシで、実際は本屋がなくなることでも本を買う習慣も消えてしまうことが多い。

歩いて行ける、もしくはふと思いついた時に立ち寄れる本屋がある意味と、商売として成り立たせる方法をずっと模索している。

【参考文献】

『複業ZINE』タバブックス

一斉着陸で一番売れた本。モリテツヤ氏も寄稿。複業している方の泥くさくてリアルな声。

『私のたべもの風土記』吉田正 山陰政経レポート

昭和五十六年五月発行。「会社の倉庫にたくさん残ってるから」と譲ってもらったもの。店でもよく売れ、出店の時も毎回持っていく、当店の隠れたベストセラー。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から (32)

村瀬 謙介

(小取舎)

レポートをAIに書かせて提出する大学生が数人いるらしい。とはいえ、それを提出された先生はその研究のプロなのでデタラメだということがすぐわかる。それでも学生はなんで期限内に出したのに単位がもらえないのかと言ってくるのだそう。せつかく大学に行っていて好きなことを研究できるのに何やってんと思う。インターネットでそういうことが世間一般的にあるのかどうか調べてみると『ChatGPT』で単位を落とさない！

AI時代のレポートの書き方』という記事も出ていたり、AIレポートがバレない方法がありますかという質問があったりして、昭和生まれの私はなんだかなあと思ってしまう。だが、インターネットが物心ついた時から普通にあるデジタルネイティブ世代だけではなく、社会人もメールや会議資料などを仕事の効率化をするために使っている人も多い。むしろAIを上手に使えないと多忙な業務を回せ

ないという風潮まである。日本のトップAI企業が謳う「AIの民主化」はもうありとあらゆるところで達成されているのではないか。

最近話題になったsora2という、自動で動画を作成するAIは、無料でも一〇秒ほどの動画があつという間に作れる。自分の思うように作るにはいくつもの正確な指示「プロンプト」が必要で、昔でいうコマンドみたいなものだが日本語で命令できるので割と簡単。できた動画は結構リアルで、すでに企業広告に使われたり、面白い動画を作ったりする人も。架空の映像なのだが、人物もそれなりに本物に近く、自然にしゃべったりしている。こう喋って欲しいというセリフをそのまま喋るという訳でなく、こういうことを話してほしいと指示すると自分で考えてそれっぽく話をする動画ができる。先行上映の映像の感想を、インタビュウを受けている観客の映像を見たことがあると思うが、面白半分で架空の映像の感想を言わせる動画もある。架空だからすぐネタだとわかるのだが、そうでなければいくらでも騙せるような気がする。騙せるというか、実際より、流行っているように見せることができるし、その逆もできる(が、訴えられる)。

何年か前に世界中でディープフェイクによる詐欺事件が横行した。会社の最高財務責任者がリアルタイムで実際に

話しているように見せたフェイクのビデオ会議で、社員に秘密裏の取引をしているので口座の振り込みが必要だと言って振り込ませた香港の事件や、大統領が本来言っていないことを語るフェイク動画などがあった。今はまだ恐怖の谷レベルで違和感がある動画があるには多いのだが、中には本当にありそうな架空CMを作っている人もおり、判断が難しいほどクオリティが高くなっていく。工業関係のオートメーション化は一般化しているが、クリエイティブの世界でもオートメーション化が進んでいて、これはなかなか考えものだ。命令文次第でCMでもアニメでもAIが作った曲やナレーションが入ったプロモーションでもなんでも作れる。

ちなみにAIを使って絵本を出版できるか試した人がいて、ストーリーも、絵も命令文を出して作らせ（修正も必要でそれはそれで大変そうだったが）、それを電子出版していた。楽すぎる。そんなものは人の心は動かされないとと思うが、人の心を動かすセオリーを組み込む指示を出せばどうなるかわからない。

文芸誌の編集委員をさせてもらっているが、今後、著者が自力で取材して想像して書いたものが本当にそうであるのかを疑わないでいられるのだろうか。ふとそう思った。

ザ・ブルーハーツが『情熱の薔薇』という曲で「見てきた物や聞いた事 今まで覚えた全部でたらめだったら面白い そんな気持ちわかるでしょう」と歌った。こういうものが溢れる世の中になると、何が真実で何が偽物かを見抜く力が必要になる。その防衛をしないと嘘の世界をこごとく踏んでそれを信じて生きてくる人も出てくる、そう思うと恐ろしい。まあメディアって昔からそういう面もあるのだ

小取舎の最新刊

『「見る場所」のメディア考古学―鳥取から日本映画史を描き重ねる』佐々木友輔・杵島和泉・Clara 編著

本体二七〇〇円 発行 2025.9



内坪井町日記（18）

齊藤 仁昭

（ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務）

八月三十一日

三者三様いいライブ。特にペンペンドンピーはすごかった。ギターボーカルのマダムギター長見順氏の足元、エフエクターなし。そういららないのです。うちも見習っていききたい。

九月六日、七日

レコーディングのため新高田寺へ向かう。歯医者さんが建てたスタジオで、ロジャースのドラムセットがいい感じなので録音にはたまに使わせてもらっている。歯医者さんは数年前に手放してしまったようで、別の方に譲ったようだ。

某バンドがコンピレーションアルバムを作りたいとのこと、一曲参加を依頼されていた分の曲を録る。ライブも続いていて息も合っていたのでできるだけたくさん録ってみようという流れにのってスタート。無事に4曲分の素材が録れ

た。レコーディングは苦手だったが今回は楽しくできた。アルバムしばらく作っていないので、もう4曲が5曲録ってアルバムを仕上げたい。

九月某日

来月の菓子イベントの準備やらクリスマスケーキのチラシ作りの諸々などで立て込む中、敬老の日の大口の注文の準備で忙しい。ありがたいことです。

九月二十七日

茨城県結城市にある「かまねこ堂」という古道具屋にてライブ。ご店主が以前名古屋にて我々のライブを見て気に入ってくれてお誘いいただいた。

朝から熊本を出て、羽田から電車で中野に向かい、中野でメンバーのレンタカーに拾ってもらいそこから3時間ばかりかけて到着。遠かった。

リハなど終えて店主と話していたら、以前町田町蔵やDMBQやズボンズなどのマネジメントをされていたとのこと。すごいやん。ちょうど昨日、会社の帰り道にズボンズのモファンキーを聴きなおしていたのであった。

十月四日

まだやるのか調布にてライブ。棚木竜介と図書館、というバンドにお呼ばれ。図書館というバンド名はいい。物販のTシャツの絵柄が図書館の返却ボックスでかわいい。棚木バンドのギター兼鍵盤の方のファンなので、ずっと聴きいつてしまふ。いいバンドだな。

これ以後、しばらくライブはお休み。年末年始の仕事に備える。と言いつつも次は12月の京都。そのあとは2月の東京、3月と4月の名古屋。

この何か月かライブの話しか書いていなかったたのでライブがないと書けることがないかもしれない。どうしよう。

十月十八日

八代の花火大会および、菓子工業組合の「くまもと菓子祭り」当日。雨の予報だったが、ぎりぎり天気を持ちこたえてくれた。イベント委員なので、私は菓子祭りの方(熊本市内のサクラマチ熊本という商業施設にて開催)に出席。花火大会には行けなかったが盛況だったとのこと何より。

菓子祭りでは県内の菓子店のどらやき23種を集め、気に入ったどら焼きに投票していただきグランプリを決める「推しどらグランプリ」をメインで開催。楽しんでお買い物をしてくださっていたように思う。イベントは翌日まで2日間開催、両日ともに朝早くから夜遅くまで張り付いていたの

で疲れてしまった。

十月某日

会社の駐車場の草刈りをサボっていたら草が繁茂して収拾がつかないほどになっていたので面倒だが草刈りを始める。薦が地面を這っている植物がやたらと増殖していたのだが、その薦が厄介で熊手に引っかけたりしてなかなかきれいに片付かない。

しばらくして、雑草に埋もれていた薦の全貌が見え始めたのだが、その絡み合い方や進み方のネットワークがみごとで、なんだか意思や意識の存在を感じてしまい、剪定はきみで切るのがなんだか申し訳ない。壁際の薦などは10本くらいがステージ後ろのケーブルの束のようにきれいにまっすぐそろっており、強度もすごかった。一日では終わらず、続きはまた明日以降にする。

論語について(6)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

子曰、為政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之、

(為政篇第二・第一章)

子〔し〕曰〔い〕はく、政を為すに徳を以〔もつ〕てすれば、譬〔たと〕へば北辰の其〔そ〕の所に居て、衆星の之〔これ〕に共するがごとしと。

孔子の説く「学」は、知の集積を従とし、徳の実行を主とするが、それは「為政」すなわち政治的行爲でもあった。孔子にとって、これらは別々のものではない。そのことは、同じく為政篇の、「或るひと孔子に謂〔い〕ひて曰〔い〕はく、子〔し〕奚〔なん〕ぞ政を為さざると。子〔し〕曰〔い〕はく、『書に云ふ、孝か惟〔こ〕れ孝なり、兄弟に友あり、有政に施すと。是〔こ〕れ亦〔ま〕た政を為すなり。奚〔なん〕ぞ其〔そ〕れ政を

為すを為さんと」の章からも分かる。或る人にどうして政治的行爲をしないか問われた孔子は、『書』に孝・友の徳もまた政治的行爲だとあれば、どうして殊更に政治的行爲をしようと答えている。徳の実行は、政治的行爲そのものだと言うのである。

本章冒頭の「政を為すに徳を以〔もつ〕てす」の句は、右のことを先ずは踏まえる必要があると思う。その上で、更に、徳による政治的行爲が「北辰」すなわち北極星と、「衆星」すなわち多くの星々に喩えられる意義について、考えてみたい。例えば、古注(『論語集解』は、前漢の包咸(一説には、後漢の鄭玄)の、「徳者、無為。譬猶北辰之不移、而衆星共之。(徳とは、無為なり。譬〔たと〕へば猶〔な〕ほ北辰の移らずして、衆星の之〔これ〕に共するがごとし)」という注釈を引いてこれを説明している。動かない北極星の周囲を多くの星々が敬意を表すように取り巻く姿に喩えられる政治上の「徳」とは、「無為」のことだと言っているのである。なお、本章に見える「共」の語は、両手を胸の前で重ねて敬意を表す「拱」の通仮字とされる。

確かに、北極星の周りを多くの星々が整然と巡る姿は、どこかオートマチックで、「無為自然」をイメージさせる。とはいえ、「無為や」「無為自然」は、老子や莊子などの道家を彷彿とさせる語でもある。そうした語を理想とする考えが

果たして儒家の孔子にもあったのだろうか。それが実はあったのである。『論語』衛靈公篇に、「子曰、無為而治者、其舜也与、夫何為哉、恭己正南面而已矣。（子〔し〕曰〔い〕はく、無為にして治まる者は、其〔そ〕れ舜か。夫〔そ〕れ何をか為さんや。己〔おの〕れを恭しくして正〔ただ〕しく南面するのみ）」と見えるのがそれである。「舜は、堯や禹とともに聖人とされる伝説上の帝の一人だが、その舜が南を向いて座っているだけで「無為にして」世は治まっていた、と孔子は述べているのである。思うに本章は「無為」をキーワードに右の一章とつながっている。

そのことを説く上で重要なのが右の章に見える「南面」の語である。この語は、『論語』ではもう一箇所、孔子が弟子の仲弓を讀えた「雍や、南面せしむべし」（雍也篇）の章に見えるが、古代では為政者となることを意味した。実際、中華においては政治を執る際に座る位置は、「南面」すなわち南向きだったという。が、どうして南を向くのか。まさにそれは本章に言うような「北辰」の喩えに由来すると考えられる。後世の都市設計にも影響を与えたように、天空の中心に居て動かない「北辰（＝北極星）」に自らを擬えたからこそ、古来、為政者は「南面」したのである。

今から約百年前、西洋的な視点で『中国哲学史大綱』を著した胡適は、老子を孔子よりも前に置いた。が、遅れて『中

国哲学史』を著した馮友蘭は、孔子の方を前に置いた。この矛盾を解くように柄谷行人はこう述べている。「最初に老子がいた。それを老子1と呼ぶことにします。彼は「無為自然」を説きました。しかし、それは老子2ないし老子3によつて書かれた『老子道德経』のそれとは別のものです。老子1は、むしろこの時代の思想家に共通する根本的な「態度」をあらわすものです。その意味でなら、老子は孔子に先行した、と考えてよいわけです」（『帝国の構造』）。

右に言う、根本的な態度としての「無為自然」とは何か。柄谷はこう論じている。「無為」とは、「為」を否定することです。「為」は、いわば、力による強制を意味します。どのような力か。一つは呪力による強制であり、いかえれば、氏族社会の伝統である互酬原理です。もう一つは武力による強制です。これは、氏族社会の崩壊とともに露出したものです。老子1がいう「無為」は、それらのいずれをも斥けるものです。この意味での「無為」は、道家（老荘）だけでなく、儒家にも法家にも共通する態度です」（同前）。思うに孔子の説く「徳」にもまた、このような意味での「無為」が根本的態度として存在するのである。

老春（前）

古賀 啓三

（米国ミシガン州在住）

先号、前振りだけに終わり、本題に行き着くことのなかった老人小説について、少し書くこうと思つたが、その前に、これも先号で触れた新居を取り囲む自然のことも、「老いの力」を借りないと見えてこない、見過ごしてしまうものがありそうなので、併せて書き留めておきたい。

庭に来る野鳥のことを書いたが、既述外にも、啄木鳥、七面鳥、鶴なんてのまで来る。アカオノスリ（鷹）は集まる野鳥を捕食する目的で、時折給餌場に姿を現す。我々は間接的に鷹の給餌場も設えたことになる。時折彼らに追われ、逃げ惑う野鳥、もしくは追う鷹自身が大音響をたててガラス窓に衝突し、ストライクしたのが野鳥だと、ほとんどの場合窓の下に羽毛を散らして死んでいる。一度鷹が地面に仰向けに横たわっていたが、気絶していたらしく、放置しておいたら起き上がり、三十分ほど呆然と虚空を見つめたのち、飛び去った。僕も凝つとその様子を見ていたのだが、今、鷹

の胸中を去来している心象も見れたらな、と思ひながら見つめていた。

ヒメコンドルは翼長二メートルにも達する巨鳥。庭に降り立つことは滅多にないが、スキヤベンジャー（腐食動物）で、悪食に相応しい醜怪なご面相だが、野鳥などの達し得ない遙か上空を、地上の屍体を求めて滑空する姿はマジエステイクでさえある。

この近辺に生息する三種の啄木鳥の中でも、Pileated Woodpecker、カンムリキツツキはウッディー・ウッドペッカーのモデルで、テレビ漫画で誇張されてはいるが、特徴のあるあの鳴き方の、鴉ほどの大きさの啄木鳥で、しかしほとんど人の目に触れることのない、Evasive な鳥である。

鳥以外にはコヨーテなんてのも出現するが、前述の、おそらくヒメコンドル以外の全ての天敵で、夜中に群れで発する甲高い遠吠えは忌々しい。鶴の夫婦に赤ちゃんが産まれ（Sandhill Crane という種なので、家内は、母親にSandy、父親はSam、赤ちゃんにSueと命名）、丘陵を一段上がった隣家のフィールドに時折親子でピクニックに来るのだが、その際けたたましい、鶴特有のカンカンカンというような Distress call が聞こえることがあるが、これはまだ飛べないSueを狙って（親鳥はコヨーテの餌食としては大き過ぎる）取り囲むコヨーテの群れに対し、威嚇の発声を

しているのである。侵略者に対し、胸をそらして自分を大きく見せ、羽ばたきながらカンカンと警告を発する親鳥たちは勇ましい。この遭難信号に聞き及ぶと、僕は丘の上におつとり刀で駆けつけ、奇声を発しながらコヨーテを追い散らす(人も彼らには大き過ぎて襲われることはない。と思いたい)。

この家の施工を請け負ったコントラクターは、ほぼ一年に渡る工程を監督し、ほぼ毎日現場(＝建設中の新居)にいたのだが、鶴もカンムリキツツキもコヨーテも一回も見ておらず、我々が住み始めて目撃譚を伝えると、へへ、いるんですね、こんなところにも、などと云つてゐる。

朝食のあとにコーヒーを飲みながら、ぼーっと窓外を眺めていると、啄木鳥特有のドラミングの音ではあるのだが、一際大きな音がして、そちらの方を向くと樹にカンムリキツツキがとまっている。おい！あの、あれがいる、はやくこい、慌てて大声で家内を呼び、なによ、なにがいたの、と彼女が駆けつけてきたときには、もう姿を消している。この間、二十秒くらい。忙しい現場監督にとっては、この近辺に鶴もカンムリキツツキもコヨーテも生息しないのだが、ぼーと自然に Immerse(没るように)していられるものだけに、二十秒間の特権が与えられるのである。自然とはそういう風にうつろうものだということがわかってきた。「老いの力」

を借りないと見えてこない、見過ごしてしまうもの、などと大仰な言い方をしたが、要するに暇人なら誰でもオツケー。しかし、そういう無為に慣れている、もしくは耐えられる人でなければならぬ。もしくは何かしら取り込みがあったとしても、何をしていたか忘れてしまい、気がつけばぼーっと窓外を眺めているような人。これらは「老いの力」を備えた人、と言えなくもない。

さて本題の「老人小説」である。そもそもそんなジャンルが存在するのか、と検索してみると「おすすめ五十三選」などと出てくるので、存在するのだろう。その中で、「孤独と尊厳」というテーマではヘミングウェイ『老人と海』、深沢七郎『樽山節考』、「性と老い」に谷崎『鍵』が挙げられていたが、『鍵』は『瘋癲老人日記』と同じ短編集に収録されていたので、ついでに読み、文芸的にはこちらの方が優れているように思つた記憶がある。記憶はあるのだが、なぜそう思ったのか、忘れてしまったので、チャットGPTに、「谷崎の『鍵』と『瘋癲老人日記』を読んだが『鍵』の方が文芸的価値があると私が感じたのはなぜか」と聞いてみた。

AIはこんなご無体な質問に答えてくれるのだろうか？残念ながら再び紙数が尽きてしまった。

蔵の外

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

蔵を探し歩いている。

市内で有名な蔵といえは、鳥取大火を生き延びた、鹿野街道筋の蔵。壁は剥落し、鉄扉は熱で歪んでいる。

小道や袋小路を徘徊していると、意外な場所に蔵が出現する。道が曲がりくねってどこに出るのか見当が付かない。元の場所に戻ってくる事ができるのか、不安になるような場所もある。恐らく大火で被災せず、結果、江戸・明治の道筋がそのまま残ったのだろう。

そんな場所だから、相当に古い物が残っていたりする。まさか江戸時代のものではあるまいが、一体いつ建てたのか、と思うくらいに朽ち果て、土壁が剥がれ、竹の格子(竹木舞というらしい)が露出しているものもあれば、近年、リフォー

ムしたと思しい、こぎれいなものもある。

いかにも武家屋敷の名残というような母屋に付属していると嬉しくなる。そういうお宅は、軒瓦に、しっかり紋が入っていたりする。

そもそも、武家屋敷には表札というものはなく、誰のお屋敷か判断するには、瓦の紋を見るしかない。そういう時に役立つレファレンス・ブックが武鑑であった。

高砂屋の蔵は、外から伺うだけだが、どうやら三の蔵まであるようだ。質屋さんも、蔵の数は多い。

蔵が多いといえは、「南部俵積み唄」という誠にめでたい民謡がある。陽気で景氣の良い歌だ。

「いろは蔵」と名付けられた四十八の蔵を持つ分限者を褒め上げる縁起唄で、正月などに門付芸人が歌ったという。棟上げ式などでも歌えば意気も上がりそうな気がするが、趣旨が違うだろうか。

文学関係で有名な蔵は、やはり、旧・江戸川乱歩邸の土蔵ということになるだろう。「幻影城」と呼ぶ向きもあるが、乱歩自身の命名ではない。

平成十四年に立教大学に寄贈され、翌年、豊島区が、区の指定有形文化財に指定。これを受けて、同大が保存修理工事に着手。十六年三月に終了し、八月に、一週間限定で一般公開された。この時は、筆者もいそいそと見学に出掛けてきた。

これに併せて、東武百貨店では、「江戸川乱歩と大衆の二十世紀」展が開催され、光文社のミステリー文学資料館では、「怪人二十面相をつかまえろ!!」として同社の少年探偵団シリーズの展示が行われていた。ファンとしては、これも見ずばなるまい、である。

所蔵されていた書籍についても、探偵小説関連から、和本へと、次々に目録化され、更に、『貼雑年譜』もデジタル化され、限定的ながら公開されている。

乱歩研究は、単なる作品論、作家論といったレベルは通り過ぎ、より広範な社会・文化史的なアプローチ、あるいはより狭く、蔵書の書誌学的な見地から、益々進展しつつある。

没後六十年の今年、母屋の施設もリニューアルし、資料館として再公開が始まったそうである。「東京人」七月号が「乱

歩、その資料の迷宮へ」という特集を組んで、紹介している。

乱歩作品の中で、蔵が重要な舞台となっているのが「人でなしの恋」。淫靡な雰囲気醸すのに、相応しい舞台である。タイトルの「人でなし」が、ダブル・ミーニングになっている所も洒落が利いている。

古くから、蔵は色事や、牢や折檻の場、また病人の隔離所といった、様々な用途に用いられてきた。捕物帳では、蔵を密室事件の舞台に使うことも多い。泡坂妻夫や都筑道夫に、トリッキイな作品がある。『本陣殺人事件』ではないけれど、日本家屋で完全に閉じられた空間というのを成立させづらいからであろう。

横溝正史にも「蔵の中」という短篇がある。これもまた、妖美な佳品である。

点と点がつながる

三浦 永理

(三十歳・女性)

いよいよ授業が始まった。

UCL (ユニヴァーシティーカレッジロンドン) の Intercultural Communication (異文化コミュニケーション) 修士のコースは百人ほどの生徒が集まっていた、気づけばその九割が中国系だった。多くが中国本土の学生、そして台湾や香港の人もある。UCL では、Applied Linguistics (応用言語学) や、TESOL (非英語母語話者に対する英語指導法) などとあわせて、ALTEC として括られるが、このコースが最も新しく二〇二二年から始まった。

「異文化コミュニケーション」と聞くと、ちゃんとした学問なのかと思われそうだが、学際的に横断した学問で、応用言語学の一部とも、心理学の一部とも、ビジネスマネジメントの一部ともいえる。

たとえば、ホフステードの六次元などは、異文化コミュニケーションの古典的な研究だ。元々は世界各国に支社のあつ

たIBMのアンケート調査をもとに、各国の国民の性質をまとめたものだ。このように文化を分類する手法は、アメリカの外交官が現地に赴任する際のトレーニングで求められてきたもので、ビジネスコミュニケーション的な異文化コミュニケーション(いわゆる cross cultural communication)の研究の多くがこのような内容だ。ただ現在では、「本質主義・実証主義ではないか」などの批判にさらされている理論でもあり、英語では「intercultural communication」とは区別される。

今学期は、ひとつ選択授業をとることができ、それが「Intercultural Education (異文化間教育)」である。

「異文化間教育」と聞くと、多くの人は国際交流や英語教育、外国語教育を想像するに違いない。かくいう私も、そのうちのひとりだった。が、授業を担当するジュリアナ・フェッリ博士によると、その理解はひどく浅いもので、全ての教育は intercultural なものだ。つまり、教育全体で、多様性やアイデンティティ形成の複雑さを理解し、対話していかなくてはいけない。

この授業の中では、自分たちの経験を持ち寄って振り返ることも求められた。鳥取という地方で過ごしてきた数年間含め、日本で暮らすことが多く「異文化」なるものに遭遇したこ

との少ない私が何を言えるのだろうかと思うことも多かった。だが、そもそも「文化(culture)」とはなにか。そんな定義すら、初回の授業から揺ぎぶられている。東京と鳥取にも違う文化があり、企業文化、教室文化など、それぞれの場所に紐づいた文化もある。知らず知らずのうちに、私たちは文化の間(inter)を行き来し、文化を作り上げている。実は、英語の「intercultural」には「異」という概念はなく、あるのは「間」という概念だ。それを表すため、「相互文化的」という翻訳もある。ちなみに、中国語では「跨文化」と訳されるそう。

この授業の手法の基盤は、「銀行型教育」を批判するパウロ・フレイレであり、教育は政治的なものであると語るベル・フックスである。いわゆる批判的教育学と呼ばれる手法の流れで、知識を流し込むような教育ではなく、学生や生徒がその身体を持つて理解し、考えることを求めてくる。授業担当者の彼女自身は、イタリアから移民としてきた人で、最初はイギリスで小学校教員として働いていたものの、政府の強い管理に疑問を持ち、アカデミアに転じた。彼女の理論の裏には、レヴィナスの理論があり、博士論文は彼の「他者」に関する理論を Intercultural Education に応用するような内容だったようだ。

そんな調子なので、授業の最中にもさまざまな哲学者や、カルチュラルスタディーズの学者の名前が出てくる。カント、

デカルトに代表される近代哲学への批判、植民地主義を批判したフアン・「ジェンダー・トラブル」を著したジュディス・バトラ、ブルデューの象徴資本などの理論。

彼らは私が「何の役に立つのやら」と頭を抱えて、読んでいた作品の著者たちでもあったし、定有堂の読書会の「読む会」で読んできたものでもあった。それらの散らばった点がつながるような時間でもある。

遠回りではあったものの、いろいろな経験を経て、今学んでいるからこそ、自分の中で納得できる部分がある。といいつつ、周りの人が私と同じくらいの納得感で聞いているかはわからない。それだけの圧倒的な情報量だ。

いわゆる日本にいる時の私の「異文化理解」の考えは、本質主義的なものであった。ある文化の考えが理解できれば、お互いの理解が深まってコミュニケーションが取りやすくなる、関われるようになる。が、私たちはそんな簡単に結びあえる点同士なのだろうか。

自分の属性が簡単に切り取れないという現実。自分の中の多様な声と向き合う。そんな教育は可能なのだろうか。

と思案するロンドンの秋は冬のように寒い。

給食

あきの素生

(くうねるめがね)



ブラインドが上がったとき、昨日までとは打って変わって、抜けるような青空がそこにあった。台風一過? でもそれより、今日は「晴れやすい日」として一九六四年に東京オリンピックの開会式が行われたというあの十月十日ではないかと思ひ至り、妙に納得してしまった。ちなみに目の愛護デーでもあるなど余計なことまで考えた。

目の前には小さな山がある。山と呼んでいいのかためられるほどの、小さな。そこには幾種類もの木々がわさわさと茂っていて、いつもどれかしらの木が風に揺さぶられ、葉をひらめかせている。右手に目をやると、山裾には湖が広がっている。

山は鳥たちの寝ぐらでもあるようだ。夕方には夥しい数の鳥たちが木々を出入りする。建物の上階だから窓ガラス

スが分厚いのか、外の音はほとんど聞こえない。その静けさの中、「かあかあ」と馴染みのある鳴き声がかすかに、でも繰り返し聞こえてきて、誰そ彼時だから飛び回る鳥たちが影のように黒く見えているのではなく、あれはすべて鳥なのだわかった。

ヒッチコックばりの光景を前に食事をする。栄養バランスやカロリーをきちんと計算されているであろう食事。白米は意外に多く、味付けは薄め。野菜の煮びたしや酢の物などはマストで、たんばく質は少ない。己の食生活を省みる。たんばく質(と脂質)が好きで、時折無性に肉が食べたくなる。白米の量を減らし、肉を多めに食べる。なんなら、餃子などの肉を使った料理だけでお腹を満たしたいという欲望が常に心の片隅にある。でも確かに、この健康に配慮された食事をとっていると、食べ終わったあとに満足感があり、あまり間食したくならない。次の食事の時間には、ちゃんとお腹が空いている。日頃の食事を見直そうというささやかな決意を胸に、食後のお茶をすすする。

何って、病院で出る食事の話だ。決まった時間に三食、あたたかいごはんを出してもらってありがたいな、としみじみした。

まず、自分が作ったり、選んだりしなくていい。料理という作業の負担は認識しやすいが、何を食べるか選ぶことにも、結構負担がかかっているのだとわかった。

それから、何が出てくるかわからないわくわく感がある。自分で選んでいないから、なんではあるが。献立表が病院のホームページ等で公表されていたとしても、献立を確認しない自信がある。配膳されるお盆の上の、プラスチックの食器のほとんどの、ふたが載せてある。保温やほこりよけのためかと思う。そのふたを開ける瞬間を心待ちにしていた。

「選べる喜び」や「自分が食べたいものだけ食べることができる自由」ももちろん尊い。でも、自分ではコントロールできないこともまた、楽しい。

以前、「これらの商品の中の、どれかが届く」という仕組みの通信販売を利用していたことがある。大まかな雰囲気やデザインまでは選んで、あとは運任せ、いわゆる「ガチャ」みたいなところを楽しんでいた。選択・決定することの負担を「誰か決めて」と放り出したい気持ちや、自分ではないものがもたらす新しい何かを求める気持ちも、少しばかりあったのかもしれない。

ただし、前提として、いつでも「選べる喜び」を取り戻

せる、なんなら「選ばないことを選べる」からこそその贅沢な楽しみ方ともいえる。

病院食のありがたきとしては、先述した「健康に配慮されている」点も大きい。完食できると、何かよいことを成し遂げたという達成感が得られた。この食事を参考に、日頃の食事を見直そうと決意した気持ちに嘘はない。なかったというべきか。

決意はした、確かに。けれども、決まった食事をとらなくともよくなった途端に、その決意は雲散霧消してしまつたようだ。やっぱりお肉が好きだ。間食もしたい。この世には魅力的な食べものがありすぎるし、決意を実行に移すには気力体力を育てる必要がある。などと言い訳しながら、今は「選べる喜び」に浸る自分を許そう。

案内



ドラメリア (座敷わらし)



定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん (県民) 文化会館

葉香太極拳クラブ

会場 麒麟スクエア (市役所二階 水曜夜・土曜昼)

・定有堂教室と太極拳の詳細は
下記の、QRコード参照

(@ドラメリア)



『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階パンフコーナー

・エスキース (倉吉) ・森の生活者・邯鄲堂・

・SHEEPSHEEP BOOKS (定有堂ビル2階)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部

・編集後記:

映画『国宝』を観てきました。故郷のとなり町にある古い劇場がロケに使われていて、いま観光客が押し寄せていると聞きました。『二人藤娘』の場面ですね。行ってみたい。

ドラメリア (編集長)

『音信不通』は月刊です。基本「紙版」で、定有堂教室の読書会や定有堂事務所周辺で配布しています。遠方の方にはPDF版を送付しています。このPDF版を自分で印刷製本して読んでも下さる方もいます。本屋「エスキース」さんは、製本して店頭で配布して下さいます。とてもうれしいことです。ぜひ印刷製本おためしください。よろしくお願いいたします。

奈良敏行 (発行人)

